

孤立環境キルギスにおける
生涯学習としての日本語学習動機づけ研究
—学習動機と継続意志に注目して—

山口 紀子*

Study of the motivations of Japanese-language learning
as lifelong learning in “Isolated Circumstances”
-a case study in the Kyrgyz-Republic-

YAMAGUCHI Noriko

Abstract

The Kyrgyz Republic is regarded as “the Isolated Learning Japanese Circumstance” since it has few chance of human and economic interaction with Japan. In that situation, it is challenging to get the pragmatic opportunities to study or work using Japanese for most of Japanese learners. Also, it seems difficult to continue to learn and hesitate from having education of Japanese language in Kyrgyz. This survey investigated motives for learning Japanese and elements affected to sustainable motivation of life-long learners. The results of factor analysis suggested that (a) they have five types of motives for learning such as 〈desires for living in abroad〉 〈interests in Japanese language and culture〉 〈self-esteem and self-improvement〉 〈development personal relationship and challenges to new domain〉 and 〈hobby and entertainment〉, (b) the lack of pragmatic opportunities and difficulties to study the language may affect to motivation low. On the other hand, the results of covariance structure analysis shows that (c) not only pragmatic motives such as 〈desires for life abroad〉 but also non-pragmatic motives such as 〈development personal relationship and challenges to new domain〉 affects to sustainable motivation high. It suggests how teachers can support learners’ sustainable motivation in “Isolated Circumstances”.

Keywords : Isolated Circumstances, lifelong learning, motivations for learning Japanese, questionnaire survey, covariance structure analysis

1. 研究の背景と問題の所在

本研究が対象とするキルギス共和国は、中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国の一つである。1991年のソビエト連邦からの独立以来外国語教育が急速に普及し、日本語教育も同年9月に開始されて以後、2017年9月現在、地方都市を含む31機関で1,505人が学んでいる（表1）。キルギス人の多くはロシア語とキルギス語のバイリンガルであり、チュルク語系言語のキルギス語と語順が似た日本語は、比較的学習しやすいと考えられている。中央アジア5カ国の中では人口（約600万人）に比して日本語学習者数が多いため、「髓一の親日国」と呼ばれている。

キーワード：孤立環境、生涯学習、日本語学習動機づけ、質問紙調査、共分散構造分析

*平成29年度生 比較社会文化学専攻

表1 キルギス共和国の日本語教育状況¹

	初中等教育	高等教育	学校教育機関外	合計	
機関数	14	10	7	31	単位：機関
教師数	17	27	12	56*	単位：人
学習者数	794	439	272	1,505	単位：人

*教師数は延べ人数。兼務が多く、実数は47名。

一方、日本との人的・経済的交流は決して多くない。在留邦人139名（外務省, 2017）の多くが国際機関の関係者らであり、日本語学習者との接触機会は限定的である。日本からの観光客は少なく、日本関連企業も小規模な4社のみで（同, 2017）、日本語を活かした就業機会も非常に限られている。このような「地域内に日本語コミュニティもなく、旅行・留学で日本へ行くことも稀で日本語との接触の少ない海外環境」を、福島・イヴァノヴァ（2006）は「孤立環境」と呼び、学習者も教師も「何のために・なぜ日本語を学ぶのか」という問題に思い悩むことを報告している。

学習動機づけの低減は孤立度²の高いキルギスでも長い間教師たちを悩ませてきた。筆者は2013年9月から2年間、現地の生涯教育機関に日本語教師として赴任していた間、多くの教育機関で、学習段階が進むにつれ日本語学習者数が大きく減少し、教師たちが学習者の動機づけ維持に悩む姿を目にした。特に就学に強制性のない生涯教育機関では、学習者の減少率が高校や大学など正規の学校教育機関に比して高い。

キルギスの日本語教育の問題点の一つとして、入山（2010）やヴォロビヨワ（2013）は日本語学習を仕事に生かす場がないことを指摘している。さらに入山は、教師として日本語教育の意義に懐疑を抱いた経験にも言及している。しかし就職機会がないといった日本語の実利性の低さが実際に学習動機づけを低減させ学習継続を妨げているのかは、これまで明らかにされていない。キルギスの日本語学習者は、日本語知識を生かす機会の少ない環境で「何のために・なぜ日本語を」学んでいるのだろうか。また彼らの学習継続を妨げる要因は何であろうか。孤立環境での日本語教育の意義を考える上で、キルギスの日本語生涯学習の動機づけとその影響要因の解明が重要な役割を果たすと考える。

2. 先行研究

国際交流基金（2015）の調査によると、海外の日本語教育機関は137か国併せて16,167機関あり、このうち生涯教育機関など学校教育以外の機関³は全体の21%を占める。学習動機づけは第二言語習得に大きく影響を与えると考えられており、日本語教育分野においても数多くの研究がなされているが、生涯学習者を対象とした研究は数少なく、孤立環境を対象とした研究はさらに希少である。本稿では「学習動機づけ」を、学習を生起する「学習動機」と学習継続を実現する「学習継続意志」からなると定義し、以下にこの二つの観点から海外の日本語生涯学習者の動機づけ研究を概観する。

2.1 海外の日本語生涯学習者の学習動機研究

堀越（2010）は、台湾の大学の夜間コースで日本語を学ぶ社会人学生の学習動機を知るため、8校471名を対象に学習動機についての質問紙調査を実施し、因子分析で検討している。その結果を見ると、〈日本文化理解志向〉等の内発的動機が中心的となっている。

郭（2012）は、シンガポールの日本文化協会と日本人会で日本語を学ぶ社会人・中高生・大学生300人を対象とした質問紙調査を実施し、その結果を前年に実施したシンガポールの大学生の調査結果と比較したところ、〈旅行志向〉という趣味・娯楽的な動機因子が、学校教育機関外の学習者のみから抽出されたことを報告している。

キルギスと同じく孤立環境にあるウズベキスタンの生涯教育機関で日本語を学ぶ64名を対象に、学習者ピリーフスを質問紙で調査した福島・イヴァノヴァ（2006）でも、道具的な動機よりも統合的な動機が高いことが示されている。また「日本語が話せれば簡単に仕事が見つけれられる」という質問項目への評価が低かったことから、「学習者は日本語の実利性の低さに気付いている」という結論を得ている。

日本語の実利性の低さが学習動機に及ぼす影響については、根本（2011）も言及している。根本は中東カターの一般社会人向け2年間日本語コース修了生10名を対象に、日本語学習開始以前から学習修了後までの動機の変化について半構造化インタビューで尋ね、「日本への興味」と「語学学習への興味」により開始された日本語学習が、やがて日本語の実用性の低さから「趣味として」の学習に変化していく過程が見られたと報告した。

これら学習動機に関する先行研究の結果では、生涯教育機関の学習者のほうがより内発的あるいは統合的動機が高い傾向が示されている。ただし日本語との接触機会が少ない環境では日本語の実利性の低さも学習動機に影響を与えていることが示唆された。しかし日本語の実利性の低さが学習継続を妨げているのかは明らかになっていない。

2.2 日本語学習継続意志に影響を与える要因に関する研究

瀬尾（2011）は、香港の日本語生涯教育機関の上級学習者11名を対象とした半構造化インタビューの結果から「日本語学習の困難さ」が動機づけの維持に影響したと述べた。さらに瀬尾・陳・司徒（2012）では学習離脱者の動機減退要因を調査し、「仕事が忙しくなった」などの社会人特有の環境要因、「学習ペースが速すぎた」などのカリキュラム上の問題、「成績が悪かった」などの学習者に属する問題が見られたと報告している。

生涯学習者を対象とした研究ではないが、日本語との接触機会の少ないウクライナで、大西（2011）が日本語専攻の大学生267名を対象に学習動機の質問紙調査を行っている。クラスター分析の結果、高学年学生のうち〈日本語日本文化志向〉と〈キャリア志向〉の動機の高い者が目標達成見込みを強く持ち学習を継続していることが示された。

これら学習継続意志に関する先行研究の結果は、「日本語学習の困難さ」が負の影響を、キャリア達成という実利的な動機の「目標達成見込み」が正の影響を与えていることが示された。しかしこの結果が孤立環境の生涯学習者にもあてはまるものかは不明である。

3. 研究目的と課題

本研究では、孤立環境であるキルギスにおいて、正規の学校教育機関以外で日本語を学ぶ学習者（以下、日本語生涯学習者⁴）を対象に、学習動機と学習継続意志に影響を与える要因を明らかにすることにより、キルギス同様孤立環境にある多くの日本語生涯学習者に対する学習支援に実践上の示唆を得ることを目的とし、以下の課題を設定した。

課題1. キルギスの日本語生涯学習者の学習動機構造はどのようなものか。

1-1: キルギスにおける日本語学習者全体の学習動機はどのようなものか。

1-2: 日本語生涯学習者と日本語主専攻大学生の学習動機は異なるか。

1-3: 日本語生涯学習者の学習動機は学習者の属性により異なるか。

課題2. キルギスの日本語生涯学習者の学習継続意志はどのようなものか。

2-1: 日本語生涯学習者の学習継続意志に影響を与える要因は何か。

2-2: 日本語生涯学習者の学習離脱希求に影響を与える要因は何か。

4. 研究方法

4.1 調査概要

1) 質問紙の作成

質問紙は、学習動機づけに関する自由記述式の予備調査から質問項目を抽出するボトムアップ的アプローチにより作成した。予備調査には、キルギスと同じくチュルク語系の国語を有する旧ソ連共和国であるウズベキスタン及びカザフスタンの日本語生涯教育機関の協力を得た。第1回調査の有効回答141件から「発想法」（川喜田、1967）によって共通概念を抽出して動機尺度を作成し、第2回調査で尺度の信頼性と妥当性を確認した上で37項目の動機尺度を選定した。また「目標達成見込み」と「学習困難度」を測る質問を各2項目、先行研究を参照し

て加えた。学習歴・性別・職業等を問うフェイスシートを添付し、ロシア語訳、ネイティブ・チェック、バックトランスレーションの手続きを経て完成した。

2) 調査時期・調査手続・対象者

2016年9月、キルギスの日本語生涯教育機関の受講生、及び首都ビシケクで東洋学・日本学専攻コースを有する2大学の日本語履修学生を対象に本調査を実施した。回答した126名のうち欠測値を除外した112名のデータを分析対象とした(表2)。なお、実施にあたってお茶の水女子大学倫理審査委員会の承認を得、調査対象者には協力依頼書を以て調査概要及び調査データの取り扱い、調査中の協力者の権利について説明した上で合意を得た。

4.2 分析枠組み

学習動機づけの多様な理論を分析し分類を試みた鹿毛(1995)は、学習意欲が心理的必然性によって三つの概念に分類できるとした。学習の対象そのものが意欲に結びつく〈内容必然的学習意欲〉、自己像や自己意識が中心になる〈自己必然的学習意欲〉、自己が置かれた社会における必然性による〈状況必然的学習意欲〉である(表3)。日本語教育の文脈では、日本語や日本文化あるいは学習それ自体に興味があって学ぶのが〈内容必然的学習意欲〉、日本語を身につけることで今より有能な自分になりたい、他者に差をつけたいなどが〈自己必然的学習意欲〉、就職や留学に日本語が必要だったり、日系人であるため継承語として学ぶ必要があるという場合が〈状況必然的学習意欲〉に当たる。本研究はこの概念を枠組みに、孤立環境における日本語生涯学習者の動機構造を明らかにすることを試みた。

表2 調査対象者

学習段階	生涯学習者		国立A大学生		国立B大学生		
	男	女	男	女	男	女	
入門(A1)	11	10	1年生	4	21	2	2
初級1(A2-1)	3	5	2年生	2	11	0	2
初級2(A2-2)	2	5	3年生	2	3	0	5
初中級(A2/B1)	0	0	4年生	3	5	1	1
中級1(B1)	1	3	計	11	40	3	10
中級2(B2)	0	4		51		13	
中級2修了生	1	3					
計	18	30					
総計	48						

$n = 112$

表3 鹿毛(1995)の学習意欲に関する概念⁵

種類	内容必然的学習意欲	自己必然的学習意欲		状況必然的学習意欲	
定義	～を学びたくて学ぶ	肯定的な自己概念の獲得のために学ぶ		状況が要求するので学ぶ	
下位概念		向上志向	相対比較志向	条件必然的	関係必然的
定義		独自が持つ絶対基準による自己の位置づけ	他者との優劣の比較	社会的手段(目的や報酬)	人間関係(学校・親・友人などとの関係)

5. 結果

5.1 キルギスの日本語生涯学習者の学習動機構造はどのようなものか

1) キルギスにおける日本語学習者全体の学習動機はどのようなものか

日本語生涯学習者及び大学生の112名のデータについて主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果、27項目による5因子が抽出された(表4)。

表4 日本語学習動機の因子分析結果

	成分					共通性
	1	2	3	4	5	
第1因子 外国生活への憧れ ($\alpha=.86$)						
09.日本に住んでみたい。	.881	.203	-.391	.028	-.024	.715
08.日本へ行って勉強したい。	.848	-.025	.046	-.058	-.103	.720
30.奨学金をもらって、日本へ行くチャンスを得たい。	.722	-.076	.220	-.186	-.126	.620
25.日本で高等教育(大学/修士)を受けたい。	.612	-.038	.327	-.066	-.172	.645
24.日本のような進んだ国の生活は魅力がある。	.525	.100	-.045	.270	.065	.491
10.日本企業で働きたい。	.487	.211	.004	.104	.019	.429
16.外国人と知り合いになりたい。	.484	-.142	.224	.193	.186	.487
第2因子 日本語・日本文化への関心 ($\alpha=.75$)						
07.日本語そのものに興味がある。	.081	.717	-.014	-.014	-.036	.544
32.日本が好きで、日本全般に興味がある。	-.083	.648	.282	-.041	.079	.556
01.日本語の勉強は楽しい。	.031	.573	-.007	.081	-.011	.387
06.日本の文化や伝統に関心があり、もっと深く知りた と思う。	.059	.551	.109	.003	.095	.413
02.日本語の教え方が好きだ。	-.035	.400	-.115	.280	-.218	.306
05.マンガやアニメ、ドラマが好きで、原語でわかるよ うになりたい。	.307	.379	-.110	.057	.148	.341
第3因子 自己肯定・自己向上志向 ($\alpha=.74$)						
19.自国と日本の関係を発展させたい。	-.041	.023	.716	.067	-.086	.545
23.日本人に自国のことを教えたい。	-.061	-.070	.517	.219	-.071	.344
18.日本語は、自分自身の将来のキャリアに役立つと思 う。	.070	.017	.506	.170	.034	.416
17.多くの外国語を身につけたい。	.269	.075	.455	-.203	.323	.473
29.日本語能力試験に合格したい。	.059	.310	.449	-.196	-.106	.351
26.何か新しいことを学んで、自分自身を成長させたい。	-.096	.163	.398	.378	.125	.509
第4因子 開拓・挑戦志向 ($\alpha=.69$)						
35.クラスのみなどと日本語を勉強するのが好きだ。	-.307	.164	.030	.654	.036	.487
11.日本語は世界で最も難しい言語の一つだと思 う。難しいことに挑戦して、自分を試したい。	.191	-.122	-.013	.579	.067	.381
33.日本語のクラスで、新しい友人を見つけたい。	-.010	.166	.171	.486	-.151	.457
21.日本はエキゾチックな国だと思う。	.171	-.176	.026	.480	.381	.413
27.日本語を学ぶことで、将来の人生が良くなることを期 待している。	.110	.149	.100	.413	-.021	.366
第5因子 趣味・娯楽志向 ($\alpha=.58$)						
20.日本語は趣味として勉強している。	.041	.044	-.123	.045	.575	.351
28.日本語は今の自分の仕事(研究)に必要なだ。	.238	-.125	.227	.252	-.539	.541
13.日本へ行って旅行したい。	-.172	-.038	.103	.131	.489	.272

第1因子は「日本に住んでみたい」「日本へ行って勉強したい」「奨学金をもらって日本へ行くチャンスを得たい」「日本で高等教育を受けたい」「日本のような進んだ国の生活は魅力がある」「日本企業で働きたい」「外国人と知り合いになりたい」の7項目から成り、日本での生活を目標にした項目の負荷が高いが、日本に限定されない、先進国への憧れや外国人とのつながりを求める項目も含むことから、〈外国生活への憧れ〉と命名した。

第2因子は「日本語そのものに興味がある」「日本が好きで日本全般に興味がある」「日本語の勉強は楽しい」「日本の文化や伝統に関心がありもっと深く知りたいと思う」「日本語の教え方が好きだ」「マンガやアニメ・ドラマが好きで原語でわかるようになりたい」の6項目から成り、日本の文化や日本語への興味関心・好意の項目の負荷が高いため、〈日本語・日本文化への関心〉と命名した。

第3因子は「自国と日本の関係を発展させたい」「日本人に自国のことを教えたい」「日本語は、自分自身の将来のキャリアに役立つと思う」「多くの外国語を身につけたい」「日本語能力試験に合格したい」「何か新しいことを学んで自分自身を成長させたい」の6項目から成り、自己成長を希求する要素とともに自身や自国への肯定意識も見られたため〈自己肯定・自己向上志向〉と命名した。

第4因子は「クラスのみならず日本語を勉強するのが好きだ」「日本語は世界で最も難しい言語の一つだと思う。難しいことに挑戦して自分を試したい」「日本語のクラスで新しい友人を見つけたい」「日本はエキゾチックな国だと思う」「日本語を学ぶことで、将来の人生が良くなることを期待している」の5項目から成り、新しい環境での人的交流や、挑戦の項目の負荷量が高く、〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉と命名した。

第5因子は「日本語は趣味として勉強している」「日本語は今の自分の仕事/研究に必要なだ(逆転項目)」「日本へ行って旅行したい」の3項目から成り、学習の必要性が低く、趣味や楽しみの負荷量が高いことから、〈趣味・娯楽志向〉と命名した。

以上の学習動機5因子を鹿毛(1995)の動機づけを説明する三つの学習意欲に分類すると、〈外国生活への憧れ〉が状況必然的意欲に、〈日本語・日本文化への関心〉と〈趣味・娯楽志向〉が内容必然的意欲に、〈自己肯定・自己向上志向〉が自己必然的意欲にそれぞれ該当すると考える。また〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉には「クラスのみならず日本語を勉強するのが好きだ」「日本はエキゾチックな国だと思う」など内容必然的意欲に該当する項目と、「難しいことに挑戦して自分を試したい」など自己必然的意欲に該当する項目が含まれる(表5)。この結果から、キルギスの日本語学習者は就職や進学などの状況必然的で実利的な動機以外にも、多様な動機を保持していることが示された。

表5 鹿毛(1995)の「三つの学習意欲」によるキルギスの日本語学習動機分類

鹿毛(1995)	内容必然的学習意欲 ～を学びたくて学ぶ	自己必然的学習意欲 肯定的自己概念獲得のため学ぶ	状況必然的学習意欲 状況が要求するので学ぶ
本研究	II 〈日本語・日本文化への関心〉 V 〈趣味・娯楽志向〉 IV 〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉	III 〈自己肯定・自己向上志向〉	I 〈外国生活への憧れ〉

2) 日本語生涯学習者と日本語専攻大学生の学習動機は異なるか

各動機因子について、生涯学習者と日本語専攻大学生の差異を見るため、それぞれの動機得点の平均差をt検定で比較したところ、〈趣味・娯楽〉因子について生涯学習者の方が有意に高い値を示し、生涯学習者と大学生の動機づけを比較した先行研究の報告を支持する結果となった(図1)。

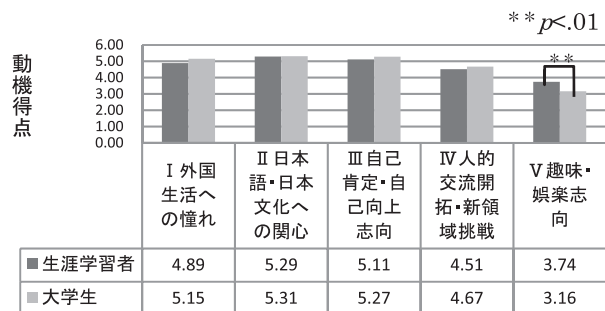


図1 所属機関による日本語学習動機の差異

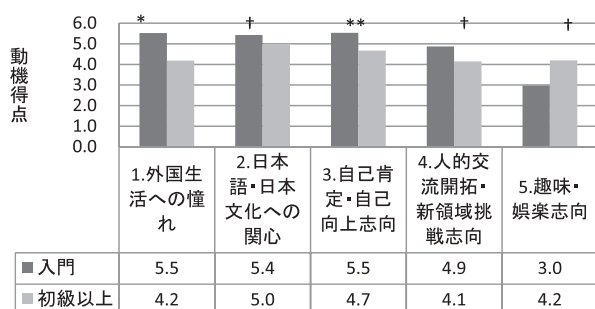
3) 日本語生涯学習者の学習動機は学習者の属性により異なるか

生涯学習者の属性による動機の差異を見るため、表6に示した調査協力者の属性のうち、社会的立場（学生／社会人・一般）、性別（男／女）、学習段階（入門／初級以上）の3要因2水準について分散分析で関連を検討したところ、社会的立場による差異は見られなかったが、学習段階と性別の交互効果がみられた。そこで男女別に学習段階における各動機因子の平均差をt検定で検討したところ、男性は学習継続段階で〈趣味・娯楽〉以外の全ての動機の強度が学習開始段階より有意に低い傾向が見られた。一方女性は学習段階における動機強度に差がなく、男性は負の影響を受けやすい可能性が示された（図2）。

表6 生涯学習者の属性

コース	在籍数	回答数	高校生		大学・専門学校生		社会人・一般		学習段階
			男	女	男	女	男	女	
入門 (A1)	23	21	4	3	4	3	3	4	入門 21
初級1 (A2-1)	10	8	1	1	2	2	0	2	初級以上 27
初級2 (A2-2)	11	7	0	2	1	0	1	3	
初中級 (A2/B1)	0	0	0	0	0	0	0	0	
中級1 (B1)	4	4	1	1	0	1	0	1	
中級2 (B2)	4	4	0	0	0	1	0	3	
中級2 修了生	6	4	0	0	1	0	0	3	
計	58	48	6	7	8	7	4	16	48

〈男性受講生〉入門n=11初級以上n=7 *p<.10 *p<.05 **p<.01



〈女性受講生〉入門n=10初級以上n=20

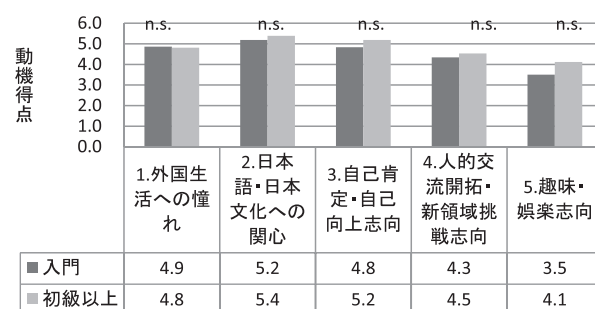
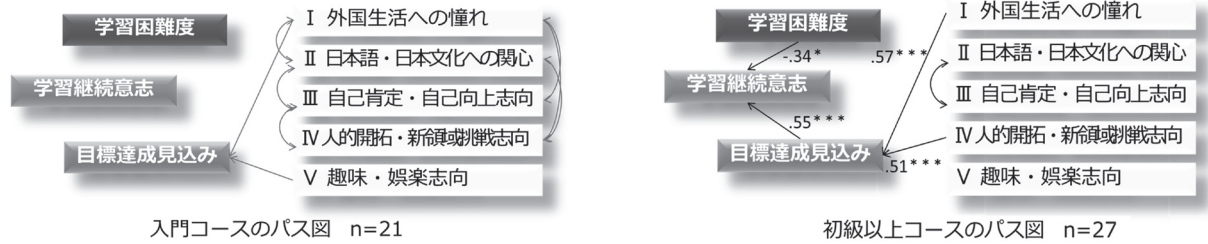


図2 学習段階（2水準）における男女別動機得点の差

5.2 キルギスの日本語生涯学習者の学習継続意志はどのようなものか

1) 日本語生涯学習者の学習継続意志に影響を与える要因は何か

学習継続意志を測定するため「今のコースを修了したら次のコースに進みたい」「今のコースを修了してもどこかで日本語の勉強は続けたい」の2項目に6件法で回答を求め、平均値を学習継続意志の得点とした。また学習困難度は「日本語の勉強に困難を感じたことがある」「日本語の勉強をやめようと思うことがある」の2項目、目標達成見込みは「今のまま勉強を続けたら就職のチャンスがきっとある」「今のまま勉強を続けたら留学のチャンスがきっとある」の2項目で測定し、平均値を各々の得点とした。次に学習継続意志と各要因の因果関係を知るため、各要因のPearsonの相関係数を学習段階（2水準）で確認し、学習動機づけ仮説モデルを構築して最尤推定法による共分散構造分析を行った（図3）。



	χ^2	df	p	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
入門モデル	24.106	20	.238	.807	.653	.928	.101	56.106
初級以上モデル	20.834	23	.591	.845	.757	1.000	.000	46.834

図3 日本語生涯学習者の学習段階別動機づけのパス図

その結果、日本語学習開始直後の入門コース生は、要因間のパスがどれも10%水準で有意でなかったが、学習継続段階の初級以上のコース生は、〈外国生活への憧れ〉と〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉の動機が目標達成見込みを通じて継続意志に正の影響を与え、また学習困難度が学習継続意志に直接的な負の影響を与えていることが明らかになった。

2) 日本語生涯学習者の学習離脱希求に影響を与える要因は何か

学習困難度が学習継続意志に負の影響を与えていた初級以上のコース生27名に対し、どのような場合に困難を感じるか、またどのような場合に学習をやめたくなるのかを自由選択式で回答を求め、それぞれ上位3位の回答について、選択した学習者とそうでない学習者との間に差があるかをみるためにt検定を行った。その結果、「仕事や他の勉強との両立」や「時間的負担の多さ」において最も困難を感じているものの、学習離脱希求を高めるのは「日本語の難しさ」であることが明らかになった(表7)。

表7 学習困難度の差異

		各困難点における困難度の差異						
		n=27			いいえ			t値
困難点		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
困難原因	仕事や他の勉強との両立	17	2.18	.66	10	2.30	.54	.50
	漢字や文法の難しさ	12	2.29	.54	15	2.17	.67	.52
	学費の高さ	8	2.19	.46	19	2.24	.67	.19
離脱希求原因	時間的負担の多さ	10	1.95	.60	17	2.38	.57	1.84
	学費の高さ	5	1.90	.65	22	2.30	.59	1.25
	日本語の難しさ	3	3.00	.87	24	2.13	.52	2.59*
	仕事や他の勉強との両立	3	1.83	.29	24	2.27	.63	1.18

*p<.05

6. 考察

6.1 キルギスの日本語生涯学習者の学習動機構造の特徴

キルギスの日本語生涯学習者の学習動機を分析し、鹿毛(1995)の三つの学習意欲に分類した結果、就職や留学のためという実利的な状況必然的動機より、内容必然的動機や自己必然的動機を中心に、多様な動機を複合的に保持していることが明らかとなった。また生涯学習者は大学生に比して、内容必然的な動機である〈趣味・娯楽志向〉が高かったことから、目標言語文化との接触機会の少ない孤立環境での生涯学習においては、「楽しみ」

としての日本語学習の側面が一層重要であることが確認された。

孤立環境の日本語学習者の特徴として従来指摘されてきた、日本語の実利性が低いため動機づけが低減しているのではないかという問題は、女性学習者には当てはまらないが、男性学習者の場合にはその可能性も否定できない結果となった。男性は学習開始段階の学習者に比して継続段階の学習者の動機が有意に低い傾向があり、唯一〈趣味・娯楽〉因子のみが高くなっているのは、「あきらめ」なのかもしれない。近隣の富裕国へ出稼ぎに行くキルギス人は全労働人口の2割程度を占めており（貿易研修センター,2013）、多くは20代の若者で、そのうち女性の割合は27%に留まる。そのため男性の外国語学習の目的に、日本での就業など実利的な動機が反映されるのは想像に難くない。

しかし就学が本人の自由意思に委ねられている生涯教育機関において、実利的な目的の達成が期待できないことに気づいたあとも学習を継続していることから、彼らが日本語学習に新たな価値を見出し、内発的に動機づけられ始めたという積極的な解釈もできよう。

6.2 キルギスの日本語生涯学習者の学習継続意志への影響要因

学習継続意志には、学習動機のうち〈外国生活への憧れ〉〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉の二つが目標達成見込みを通じて正の影響を与えていたことから、これらの動機を高める働きかけをすることで継続意志が強化されることが示唆された。〈外国生活への憧れ〉は日本語の実利性が低い孤立環境においては目標達成が難しいが、それに挫折したとしても〈人的交流の開拓・新領域への挑戦〉の動機が高まれば、継続意志は維持されると考えられる。また継続意志に負の影響を与える〈仕事や勉強との両立〉〈時間的負担の多さ〉などの社会人特有の環境要因以上に、〈日本語の難しさ〉が学習離脱を促進するということは、教師が学習教授デザインに配慮することで解決可能な問題であるといえよう。

7. 本研究から得られた示唆、今後の課題と展望

本研究は、日本語孤立環境であるキルギスにおいて、正規の学校教育機関以外で日本語を学ぶ生涯学習者を対象に学習動機と学習継続意志に影響を与える要因を明らかにすることにより、キルギス同様孤立環境にある多くの日本語生涯学習者に対する学習支援に実践上の示唆を得ることを目的とした。分析の結果、孤立環境において学習動機を低減させないためには、教室内での交流や楽しさや、新しいことを学ぶ楽しさに気づかせ、内容必然的な動機や自己必然的な動機を高めることが重要であることが示唆された。また学習継続を妨げないために、生涯学習者が日本語のどのような側面に学習困難を感じているかを知り、〈日本語の難しさ〉を軽減し、自己効力感を得られるための指導上の工夫が求められることも示された。

久保田(2016)は第二言語習得分野の生涯教育における教師の役割について「needsより、多様なwantsにももっと注意を払うべきである」と述べているが、日本語のneedsが低い孤立環境において、「何のための日本語教育か」について考える時、教師は学習者自身のもつ意味づけに留意し、動機づけられるように働きかける役割を担っていくべきであろう。

本研究はこれまで焦点の当てられることの少なかった孤立環境の日本語生涯教育に注目し、学習継続困難の問題解決に具体的提言ができたことに意義があると考えられる。ただし動機づけの変化については学習段階の異なる対象者の比較により検討しているため、今後は縦断研究により検証する必要があるだろう。今後も継続的な調査を行い、蓄積した豊富なデータを用いて分析を精緻化していきたい。

【謝辞】

調査にご協力いただきましたキルギス、ウズベキスタン、カザフスタンの日本語学習者の皆様、並びに教師の皆様にご心より御礼申し上げます。またご指導いただきました当学教授の森山新先生、東京電機大学教授の黒沢学先生に深謝いたします。

【註】

- 1) キルギス日本語教師会調査報告(2017)より筆者が作成。
- 2) 在留邦人数÷日本語学習者数で算出(邦人旅行者と日系企業数の多い国は除く)。2014年現在キルギスは8位。
- 3) 民間の日本語学校、公的機関運営の生涯教育機関、高等教育機関などが一般市民を対象に行う語学講座、国際交流基金主宰のJF講座、インターネット教育(学習者個人を特定できるもの)、企業内研修等を指す。
- 4) 生涯教育機関の日本語受講生の中には高校生や大学生もいるが、本稿では生涯学習者として扱う。
- 5) 鹿毛(1995)をもとに筆者が作成。

【参考文献一覧】

- 入山美保(2010)「キルギスにおける日本語教育の現状と課題」『筑波応用言語学研究』17, 85-98.
- ヴォロビヨワ・ガリーナ(2013)「キルギスの日本語教育事情」『世界の日本研究 2013日本研究の新しい動向』国際日本文化研究センター, 17, 59-67.
- 大西由美(2011)「目標達成見込みの高低と動機づけの関連—ウクライナにおける日本語専攻大学生の動機づけ調査—」『北海道大学国際広報メディア・観光ジャーナル』12, 21-40.
- 郭俊海(2012)「なぜ第三言語か?—シンガポールの日本語学習の動機づけ—」『比較文化研究』日本比較文化学会100, 50-60.
- 鹿毛雅治(1995)「内発的動機づけと学習意欲の発達」『心理学評論』38-2, 146-170.
- 川喜田二郎(1967)『発想法』中公文庫
- 久保田竜子(2016)「消費としてのび—言語学習のフレームを問い直す—」『言語教育の商品化と消費を考えるシンポジウム報告集』(電子書籍)
- 瀬尾匡輝(2011)「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る—」『日本学刊』14, 16-39.
- 瀬尾匡輝・陳徳奇・司徒棟威(2012)「なぜ日本語学習をやめてしまったのか—香港の社会人教育機関の学習者における動機減退要因の事例—」『日本学刊』15, 80-99.
- 根本愛子(2011)「カタールにおける日本語学習動機に関する一考察: LTI日本語講座修了生へのインタビュー調査から」『一橋大学国際教育センター紀要』2, 85-96.
- 福島青史・イヴァノヴァマリーナ(2006)「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み—ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として—」『国際交流基金紀要』2, 49-64.
- 堀越和男(2010)「台湾の大学の夜間コースにおける日本語学習動機—日本語を専攻する学習者を対象に—」『国文学踏査』大正大学国文学会, 18, 292-280.
- 外務省領事局政策課「海外在留邦人数調査統計平成29年要約版(2017年10月1日現在)」(2018年5月30日最終閲覧)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000260884.pdf>
- 国際交流基金「2015年度海外日本語教育機関調査(速報)」(2018年5月30日最終閲覧)
<http://www.jpff.go.jp/j/about/press/2016/057.html>
- 貿易研修センター「連載中央アジアと日本第4回キルギス共和国2013年7月31日」(2018年5月22日最終閲覧)
<https://www.iist.or.jp/jp-m/2013/0221-0898/>